

ひまわり通信

社会福祉法人 北光福祉会

TEL (0158) 46-2120 <http://www.hokko-fukushi.or.jp/office/>

ひまわり学園 くれよん ばすてる

〒099-0622 北海道紋別郡遠軽町生田原安国302番地7

TEL (0158) 46-2020 <http://www.hokko-fukushi.or.jp/himawari/>

向陽園

〒099-0622 北海道紋別郡遠軽町生田原安国347番地2

TEL (0158) 46-2525 <http://www2.ocn.ne.jp/~koyoen/index.html>

地域生活支援パオ ゆめいく 燦ホーム センターもね

TEL (0158) 46-2120 遊友やすくに ぱれつと遠軽

相談支援室ま〜ぶる TEL (0158) 46-3383

246号



2018/11

さようなら 平成

ひまわり学園長 湯浅 民子

平成の御世が、来年の四月をもって終わるといふ。とするとこの年末は、平成最後となる。そう思うと、過ぎ去ろうとしている平成の三十年間への愛おしさがわいてくる。

平成元年一月八日、平成の記念すべき初日であるこの日は、私にとって特別な日である。その日の北海道新聞の「朝の食卓」というコラムに、私の書いた一文「七百足の手袋」が載ったのである。執筆者としての簡単な略歴が、小さな顔写真とともに載せられて……。

このコラムは今も第三社会面で続いているが、当時は第二社会面という新聞を裏からめくるとちょうど真ん中あたりの目につく位置にあった。四十人近くいるらしい執筆者の文章の中から、なぜ私が選ばれたかという内容が昭和天皇の崩御に伴って、新しい平成が始まるという節目にふさわしい内容であったかららしい。

貧しかった昭和の時代のひまわり学園の子どもたちに、毎年、かぎ針編みの手袋を編んで届けてくれる夫人がいた。十数年続けられたが、目が悪くなり今年で最後にしたい、との便りが届いた。それを伝え聞いた別の夫人が、手袋を編んで届けたい、と申し出てくれ

た。心温かい定期便に終わりは無かった、と内容である。

これに始まり、コラム執筆は三年に及んだ。今のようにネットが普及していない時代のことで少なからぬ反響があり、同時に名前が知られ、原稿書きと相まって何かと忙しい思いをした。長く書くことになったのは、私が身を置く障害福祉の現場が、一般の人たちには回り難い世界だったからだろう。

文の最後に執筆者の所属が載るのだが、あえて「精神薄弱児施設長」(当時の法律用語)とさせていただいた。その名称を広く知らしめたいと思ったから。

同じ時期、ひまわり学園は園舎改築の時を迎えていた。昭和四十四年、電話中継所の建物を再利用して開園した建物は、どう手を加えても子どもたちが生活するにふさわしい園舎にはならず、国と道の補助金に加え、当時の生田原町の全面的な財政支援を得て平成二年に改築が行われた。

初夏に工事が始まり、翌年三月に園舎は完成するのだが、夢中のうちに過ぎたその間のことは、正直よく思い出せない。

鮮明に浮かぶ光景は、完成した建物見学をしたときの子どもの嬉しそうな笑顔だ。準備期間も含め、数年にわたった改築の苦労が報われた気がしたものだ。

新園舎は、一〇人ごとのユニットで、別棟

のユニットも一か所あり、居室は個室と二人部屋からなっていた。最近でこそ、子どもの施設の少人数のユニット化が国レベルで語られるようになったが、当時の法律上の最低基準では「一室十五人以下」と規定されていた。まさに画期的な冒険に等しいことであったが、これは既に法人内の成人施設向陽園で実践しており、その成果のほどを目の当たりにしていたから迷いは無かった。

平成四年には、ひまわり学園以上に劣悪な環境で教育をしていた養護学校ひまわり学園分校の校舎が新しく新築された。

かくしてひまわり学園は、平成の時代を新装なったユニットの園舎で過ごすことになったのである。

*

障害福祉を語る上で忘れてはならないのは、グループホームが制度化され、障害はあっても地域で生活する道が開けたことである。

それが平成元年のことであった。

さっそく向陽園が平成二年から遠軽町内で運営を開始した。平成七年からはひまわり学園も、児童施設でありながら運営を開始した。当時のひまわり学園は、二十歳を過ぎた過齢児の行き場が確保されないという課題を抱えており、その解消を目的としていた。

最初は障害程度の軽い人を対象にしていたが、あるとき対象とは考えていなかった人に

「僕もグループホームに行きたい」

と言われ、運営の視点ばかり優先させて人の選別を行っていたことを反省させられた。

以来、余程介助度の高い人でない限りは、グループホームに移行することを進めてきた。自閉症の人にとってはグループホームの生活は最適であることを知らされた。

そんなふうに障害者の夢の実現に確かな手ごたえを感じていた当時。しかしそれは長くは続かなかつた。

バブル景気が崩壊したあたりから不気味な胎動を続けていた社会福祉基礎構造改革が、平成十四年にスタートしたのである。

それまで措置という入所方式をとってきた障害者の施設に支援費支給制度が導入され、対等の立場で利用契約をするという大きな転換が図られた。対象の幅も広がり、利用者が急増して国の支出が増え、その対応策として障害者に一定の負担を求める障害者自立支援法がスタートする。当然のことに反発や批判が噴出し、見直しが繰り返される。

現在、障害者総合支援法に落ち着いたが、施設現場はそうした制度変化への対応に振り回され続けたのである。

ひまわり学園などの児童施設も例外では無かった。戦後の児童福祉法制定時から児童養護施設と並んで児童福祉施設に位置づけられ

ていた障害児の施設は、平成九年に児童福祉施設から外されてしまう。次世代育成という旗印を掲げた児童福祉の対象から障害児は除かれ、障害者福祉に組み入れられたのである。

平成十八年十月には、児童入所施設にも契約制度が導入される。しかし「自立」をうたった制度が児童に合うはずもない。入所形態は従来の措置制度と契約制度の二本立てになり、その扱いは全国で混乱を極めた。契約率が八割を超える県があれば、措置が十割に近い県もある。県ごとにそんなに差異があるはずがないから、これは子どもの福祉に対するその県の姿勢なのである。

施設現場は二つの基準の中で、多くの矛盾や疑問を内在しながら運営することになる。

平成二十四年には、障害児福祉が児童福祉に戻されることになったが、一旦できてしまった仕組みはなかなか変わらない。制度の狭間での混迷は、今だに続いている。

*

園舎改築が一段落し、新聞で知名度が増した私の元に、さまざまな役職や公職が回ってきた。子どもの福祉や教育への発言の機会ととらえ、できるだけ引き受けてきた。

それらは町内、地区から、全道、全国にまで広がって忙しい思いをすることになった。特に、障害関係施設の全国組織である協会の児童部会の委員として、八年の間、全国の代

表者と障害児入所施設の在り方や改善を求めた。活動を行った。力を尽くしたつもりだが、自分がどれだけ役に立てたかと考えると疑問符がつく。私たちの願いや思いは少しも国には届かなかつたし、形として残らなかつたのだから。徒労感ばかりが積み重なった。けれども全国に視野を広げ、各地に知己を得られたことは幸いだった。

忙しい日程で移動を繰り返していたある日、飛行機の中でそれまでにない耳の痛みを感じた。ああ、体が悲鳴を上げていると感じた。外での役職をこなすということは、その分内をないがしろにせざるを得ない。

改めて見回せば、新しく輝いていた園舎は色あせ、補修や改善の必要が出てきていた。新しいグループホームの建物や就労事業の開拓など、懸案が重なっていた。それらに専念しなければと気づかされた。

製パン事業、サン・コロネの開始、障害の重い人のためのグループホームの新築、ユニットを増やすための園舎増改築工事の実施等々、最後の十年は、新規事業や施設の充実に費やされた。今現在も、合わせて五棟のグループホームの新築工事が進められている。その一つが先日完成し、入所予定の子どもと見学会を行った。

「え、この広い部屋が、僕だけの部屋！」と興奮し、瞳を輝かせる子ども。無理もな

い、ひまわり学園の居室は半分の大きさしかないのだから。施設とはやっぱり貧しかったのだと改めて感じた。

ひまわり学園は来年で開園五十年を迎える。昭和の二十年間は、向陽園開設を含め、福祉の基礎固めの期間とすれば、平成は、グループホームや通所支援事業など、地域での福祉の発展充実に努めた年月だった。

同時に障害福祉のあり方が大きく変転し、自らの変容を迫られた年月でもあった。

規制緩和により、民間が参入して多様な事業所が増えた。平等、権利擁護、虐待防止、差別解消などの言葉が次々と生まれる一方で、「福祉施設」は「事業所」となり、施設長は「管理者」となった。「指導」は「支援」になり、「処遇」は「サービス」になった。

単なる制度や言葉の変化だけでなく、その根底にあつたはずのものが見当たらなくなっていたりする。長く福祉に携わってきた身としては、どこか馴染めない。

人の幸福を創り出すという、福祉が本来持っていた精神や使命、誇りといったものが薄まってしまったと感じる。そう感じる自分もはや古いのだと考える自分もいる。

*

平和や安寧がイメージされた平成は、「災」と言う字に表されて終わろうとしている。

平成の後半は、大地震や大洪水が多発し、信じられない被害をもたらした。平成最後の今年も災害が相次ぎ、北海道も思いもかけない地震の被害と、停電に見舞われた。

地球という大自然の営みの前に、人間が培った文明の脆さを思い知らされた。しかしいづれもが人為的なものではなかつたことに救いはある。

平成最後のひまわり学園もまた、いろいろなことが起こった。思春期にある子どもが引き起こす行動に苦慮したり、思いもかけない悲しい別れがあつたりして、秋の終わり頃まで平常とは言えない状態が続いた。

しかし考えてみれば、何ごともなく平穩無事に過ごせた年など無かつたことに気がつく。成長発達期や思春期の子どもを預かる施設とは、そうしたもののなのだろう。

平成の後半に相次いだ制度の変遷もしかりで、多くの人が満足できる仕組み作りへの試行錯誤の年月であつたと考えれば納得はできる。良くなった部分はたくさんあるのだから。その意味で平成とは、災害を乗り越えながら、より良いものを求めて前向きに、懸命に生きてきた時代と言いつてもいい。

できるのかも知れない。感謝をこめて

さようなら 平成(了)



北海道フラックアウト

ひまわり学園副園長 藤井康成

9月6日、午前3時7分、深夜であったがたまたま自室の机に向かっていた私は、突如部屋の明かりが消えたことに驚いた。

「一体、何が起こったのだろうか：」

部屋のカーテンを開けても、辺りはいつもと変わらず静けさを保っている。

近くにある懐中電灯でスマホを探すと、配信登録してあるニュース速報のメールが鳴る。

「震度6強 胆振地方中東部」(後に震度7)、直感して地震による停電だと確信する。只事ではないことが起きているようだ：。

学園は大丈夫だろうか：。学園にはポータブルの発電機のみで、非常用の自家発電装置は無い。避難誘導などの為にある消防設備の非常灯の明かりは、30分しか持たない。

就寝中の家族に、胆振で大きな地震があり、停電となっていることを告げ、車に飛び乗った。カーナビのテレビを付け、信号も街灯も消えている中を学園に向かって車を走らせる。詳細な情報を得たいが、テレビからは大きな地震があったことのみが繰り返される。

午前3時30分、学園に到着。隣接する養護学校の建物ではフラッシュのようなランプが点滅している。けたたましい動力音は、学園のプリンクラー非常用発電機が作動しているのだった。

学園内に入ると3名の宿直職員が集まっていた(内線も不通のためLINEで連絡を取り合ったとのこと)。非常灯はもうすぐ消えることを伝え、事務所内にある非常用の懐中電灯をかき集め、それぞれに渡す。園内はサーバーなどへの無停電装置や、消防設備警報盤からアラームの音が鳴り響いている。

午前5時30分、名雪栄養士と大柳用務員がどちらも自主的に出勤してくる。栄養士から厨房は停電でもガスで煮炊きができるので朝食は大丈夫と伝えられる。大柳用務員は万が一に備えた水道の操作を行っていた。

午前7時頃、地域唯一のコンビニに立ち寄ると、開店間もない関わらず、すでに多くの人が店に詰めかけ、食品や飲料水を我先にと買い求めている。

固定電話が不通となり、パソコンなど全ての機器が使用出来ない事務所において、唯一の情報入手はラジオであるが、地震の詳細や被災地の状況、発電所について政府の発表にいつまでこの状況が続くのかと心配になる。

通信手段であるスマホには「午前8時付近に再び、大きな揺れが予想される」「町内の水が昼から断水される」など、災害時によくある不安を煽る情報がSNSを通じ流れてくる。

朝を迎えたが、養護学校をはじめ全ての通学校全てが休校となったほか、法人内の通所事業所も休業になった。通所の職員がグルー

プホームに応援に入ったり、想定外、予測の付かない事態の中で、それぞれが子どもたちや利用者の安全のために力を尽くしていた。

午後7時頃には辺りは暗くなり、暗い不安な夜を迎える。学園の子どもたちはランタンや懐中電灯をデイルームに用意し、集まって夜を明かすこととなった。環境の変化に弱い子どもたちが、冒険心をくすぐられるのか意外に明るく元気であることに救われた。また全ての明かりが喪失した夜空は、いつも以上に星が鮮明で美しく、感動的でした。

幸い学園は、翌日の明け方に電力が復旧し、一部の物流が不通となり、食品は品薄となったが、人的にも物的にも被害は無かった。

ニュースで震度7という大きな地震が厚真や札幌など広範囲に襲い、死者も出たという被害の全貌を知ると、驚きと傷ましさを胸が痛んだ。

幸いにも被害が無かったから良かったと済まされることではない。電力については「無理のない範囲での節電」を要請されているが、同様なことが厳寒期となっているこの時期に起きた場合、リスクはより大きいものになっただろう。

学園においては、この停電や地震を踏まえ、備蓄品の補充や非常用暖房の充実など計画的に対策を進めているところである。

とりあえず

できることから

ひまわり学園支援課長 千田 嘉人

「そんなこと知らなかった〜」

「いいこと聴いた」

「今日の話、もつと早く聴きたかった（聴いていれば…）」

これらは先日、私が講師を務めた専門里親養成のための研修で、参加者からいただいた言葉です。依頼されてお話しした内容は、「障害福祉援助論」。簡単に言えば、障がいについての基礎的な知識や理解、技術の習得を目的としたものでした。

私自身、勉強中の身であり、的を得た研修になったかどうかはさておき、参加者の方からそのような言葉を聞くことができたことに大きな満足を感じました。研修を通して、これまでに関わった子どもの顔が浮かんだり、前向きに子どもと関わるきっかけになったのではないかとも思いました。

何より嬉しかったことは、障がいを理解することは、そんなに難しそうではないと参加者の方が感じてくれていたことでした。

障がいを持っている人にとっては障がいがあることが当たり前で、その当たり前を理解すればいい、という感じで話しを進めました。「少数派」である障がいのある方々を理解して関わる人が一人でも増えてくれたらという

目的も、少しは果たせたかなと感じました。

障がいという言葉は、今はかなり身近になっています。特に「発達障がい」という言葉は、メジャーなものとなり、TVでも発達障がいを持つ方を主人公にしたドラマやドキュメンタリーが頻繁に流れていますし、当事者が執筆された本も多く出回っています。

研修会に参加しても、障がいを持つ子どもの親御さんが講演していたり、当事者自身が自分の体験談を話すことも増えています。

これらの中で語られているのは、障がい（特性）って何なのかということ、理解して欲しいということ。それらが分かりやすい言葉でチカラ強く語られるので印象深く残ります。このような世の中の動きや活動に、敬意と感謝を抱くとともに、率直に嬉しく頼もしく思います。理解が広がっているのを日々実感できるからです。私の親戚の中でも、「一つのこと」に夢中になると周りが見えなくなるから、私にも障がいがあるね」と言っていたのを思い出します。

福祉や教育の現場においても、確実に理解は広まっています。一昔前は、障がいを持つ「少数派」である彼らの示す行動を、「勝手だ」「わがままだ」「親の育て方が悪い」と言う「健全」と呼ばれる「多数派」の人がたくさんいました。

今はそういった見方が変わり、その行動に

は彼らなりの理由があることや、それに目を奪われず、彼らの良い所に目を向けようという考えの方が広まっています。

誰にでも長所と短所がある、と言う人がいますが「誰にでも」の中に、今は障がいを持つ方もちゃんと含まれてきているように感じています。

とはいえ未だに障がいを持つ方の生きづらさが社会にたくさん存在しています。そしてその方々と暮らすご家庭や支援する現場においても苦悩している方が多いのが現状です。なかなかキレイごとだけでは済まないことが多いのも、ひまわり学園の現場です。

そんな渦中にいる私自身ではありますが、世間の障がいへの理解が少しずつ広がっていったように、私もとりあえず、できることから仲間と一緒に、良い実践を重ねていきたいと思えます。

また今回、専門里親研修の講師を通して、様々な背景の子どもを、ご自身の家庭で引き取り、養育をする里親の方々の体験談をお聞きしたことが大変収穫になりました。

立場は違いながらも同じ仲間の存在を知ることができ、これからも相互に連係し、力を合わせて行きたいものと感じさせられました。



グループホーム ハイム茜完成

瞰望岩のふもとに



社会福祉法人清水基金
からの平成二十九年助成金

を得て、町内西町に新築工事を進めてきたグループホーム工事が、去る十二月二十日に完成し、この度、引き渡しを受けました。

晴れた日には、赤い出窓屋根とクリーム色の外壁が目映く目立つ木造二階建ての建物で、スプリングカラーや通報装置などの消防設備も完備し、七つの居室(7・9帖)やデイルーム(17帖)設け、トイレも一階と二階に三箇所を完備した日当たりも良くバリアフリーにも対応した住環境が快適なホームです。

遠軽町西町は、遠軽で一番早くに拓かれた地域と言います。建物は、景観文化財にもなっている遠軽の名勝「瞰望岩(がんばらういわ)」のふもとに位置し、JR石北本線を望むことができます。

ホーム名は、かつて同じ西町地区(サポーターセンターゆい隣)にあったグループホーム「ハイム茜」の名称を復活させ、主に就労支援などの事業所に通所している方の男性用ホームとして来年1月半ばより開設します。

先日、内覧を兼ねて来春、入居予定のひまわり学園の男子児童や学園、燦ホームの各職員に対し見学会を行いました。特に移行する

児童においては、個室であることやその広さに驚いていた様子で、これから控える退園後の地域生活に対するイメージがより鮮明になったのではないのでしょうか。

また、徒歩一分以内の距離に、グループホーム「ぴあ西町」や相談支援室「まぐぶる」の入ったパオ遠軽もあり、それぞれと連携しながら運営や地域生活される方への充実した支援が可能となります。

今回、この新築工事にあたり助成額上限額である一千万円の助成をしていただきました。社会福祉法人清水基金様には、改めてこの場をお借りしましてお礼と感謝を申し上げます。

◇工事の概要

住所…遠軽町西町1丁目3-56、3-78

構造…木造亜鉛メッキ鋼板葺2階建

施工業者…苗田建設株式会社(遠軽町)

設計業者…株式会社 佳総合設計室(札幌市)

総事業費(土地取得費を含む)

5833万6960円

財源

社会福祉法人 清水基金様 1000万円

ひまわりの里後援会様 200万円

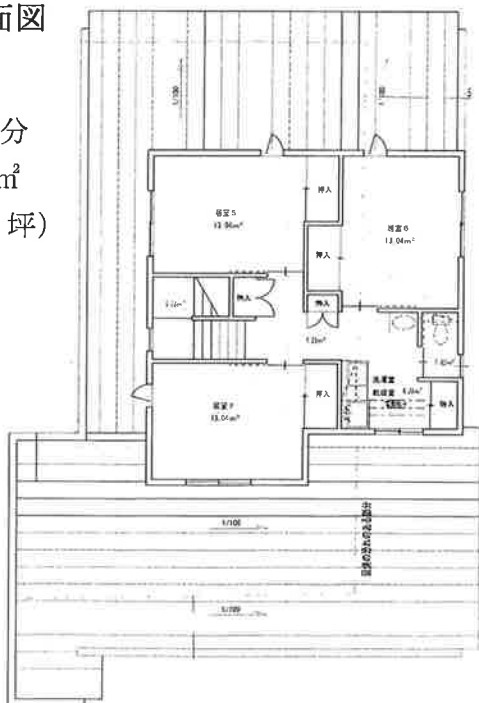
自己資金(銀行借入金含む)

4633万6960円

(文責 藤井)

ハイム茜平面図

2階部分
65.21㎡
(19.7坪)



1階部分
162.03㎡
(49.0坪)



御礼



平成三十年七月一日から十一月三十日までの間に、ひまわり学園、向陽園、燦ホーム、ゆめいく、センターもね、遊友やすくに、くれよん、めるくる、ぱすてるに、次の多くの皆さまからご芳志をいただきました。秋になると、収穫した作物や産物を届けて下さったり、面会するとき、他の子どもの方までおやつを持参して、分けてくださる保護者の方々に感謝いたします。

ひまわり学園分校の近藤教頭先生はじめ先生方が、花火大会、夏、秋のひまわり祭など行事の度にボランティアとしてお手伝いして下さいました。卒園して調理師にMくんも、秋祭りの模擬店で手伝ってくれました。

夏休み中、家に帰れない子どもを何人かの職員が自宅に連れていってくれました。ご芳志を寄せてくださった方のお名前はつぎのとおりです。紙面を通じて厚くお礼を申し上げます。
(順不同・敬称略)

《金一封》

後藤きよみ(土幌)

《物品のご寄贈》

日下部薬局 遠軽町民生委員児童委員ご一同
大湧工業(株) 細野石油(株) 本田典子 高橋梓
はたの商店 片川雄二 野口真生 北光学園
青野恵美子 山本ミサ子 中野モーターズ(株)

加藤美希 山川悟 徳丸美智子 安国神社総務会 光紀(株) 北見トヨペット(株) 山本峯久 細矢幸次 黒瀧久子 温森幸治 井筒ひとみ 横井サツ子 峯田昭栄 浅井宏實 佐藤富枝 小林幾子 梶田伸男 坂本二三夫 高橋捷史 堀田恵美子 佐藤ゆかり 港秋恵 山谷洋子 加藤あゆみ 石沢明 丸山博之 伊藤三千子 平井恵美子 仲野馨 井上利典 大崎喜代美 工藤洋一 阿部豊子 阿部政義 三浦美知子 長屋久美子 後藤仁美 我妻敬義 森本麗子 佐藤マサ子 仲野スミ子 柏谷貴文 福田進 有倉リヨ子 千葉美佐世 森田千春 小林実 安村栄子 清水直人 長岡幸三 山田郁子 織田祐美 安西(遠軽) 涌島正隆 水谷利子 川地栄子 阿部勇作 安彦好子 土門善弘(湧別) 遠藤正治 山岸文夫(佐呂間) 会田勝男 北見トヨペット(株) 佐藤佳代子 葛木和博 船場弘治 井關利男 阿部美代子 尾藤照明 西田光子 石澤英一 折川重夫 丸山守 川森修二(北見) 石田幸子 滝口貞子 島田和男 谷田エイ 佐藤裕子 廣島真実 山下常男(紋別) 寺町由照 馬場洋子(訓子府) 小野仁志 小野忠義 小野寿子 今村由美 楠目広志 有路カズ子(美幌) 西澤利秀 村田清一 梨ハナ子 石田栄子 中野宏(大空) 坂本美幸 渋谷幸子 田中ゆかり(斜里) 後藤きよみ(土幌) 小野富和子 中井 池田(帯広) 齊藤久恵(新得) 道見幸男(厚岸) 今井知佳子 高田

晃子 西村和美 柿崎有美 田中和敏(旭川) 大西タマエ(上川) 小川勝彦(名寄) 三澤勝(東神楽) 福祉ファミリー 須藤利昭 今多紀子 鍋田正勝 小川真理子 井村武夫 途中スエ子(札幌) 阿部理美子 宮本芳(江別) 佐久間カツ子(石狩市) ワタキューセイモア(株) 千歳いずみ学園(千歳) 池田商店(雨竜) 天使の園(北広島) 太陽の園(伊達) 白川陽子(函館) 永田叙子(東京) 岩村栄子(千葉) 大場玲子(埼玉)

《ボランティア》
吉田獣医師 紋別養護学校ひまわり学園分校 有志 金崎紘子 石川一誉(遠軽) 森川翔揮(北見)

ひまわりの里後援会だより

平成三十年七月一日から、十一月三十日まで、次の皆さまからご芳志をいただきました。紙面を通じて厚くお礼を申し上げます。
(敬称略・順不同)

伊藤美千子 千葉美佐世 堀田恵美子(遠軽) 大口眞一郎 大口侑希子 岳上光雄(湧別) 水野知一郎 島田和男(紋別) 佐藤佳代子 今本勲 西田光子(北見) 成瀬俊悦(雄武町) 内海進(網走) 野田勅子(音更) 後藤きよみ 星屋泰賢(土幌) 折田明日香 我妻俊治(札幌)

★後援会では書き損じはがきを集めています。

保護者の皆さんへ

◇ひまわり学園関係◇

今年には冬の訪れが遅かったのですが、十一月下旬に雪が降り、来るべきものがきたと何やら落ち着いた気分になります。

この秋の当地方は、穏やかな好天が続き、秋のひまわり祭、安国神社秋季祭典なども戸外でのびのびと行うことができました。

台風の影響も、地震の揺れもほとんどなかったのですが、九月六日のブラックアウトには驚かされました。子どもたちの生活自体には支障はありませんでしたが、電気を使えない不自由さや、突然の予定変更に不安定になる人もいました。夜の暗さに冒険心をくすぐられるのは子どもならではです。

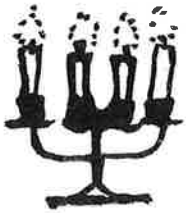
九月末には、睦み寮の小野瑚碧くんとの悲しい別れがあり、お別れ会で涙する子どもがたくさんいました。十月にはサンが十七歳の天寿を全うし、中庭がさびしくなりました。

十月、十一月には、通っている各学校の学祭や学芸会が行われ、それぞれに成長の姿を見せてくれ、感動させられました。

今のところ風邪も流行せず、クリスマスなどの年末の行事を楽しみにしています。

冬期帰省に向けて準備をして

いますが、帰省する子はおもちろん、学園で過ごす子にとっても、無事楽しいお正月になりますように。



◇向陽園関係◇

今年も終わりに近づき、安国の土地は例年よりも雪が少なく、場所によっては土が見えるほどです。朝晩は例年通りしつかりと冷え込んでおり、体調を崩さないようしつかり防寒をして過ごしていましたが、十月頃より園内で風邪が流行し、ご迷惑、ご心配をお掛けいたしました。その風邪も今は落ち着いて、通常の生活に戻っております。

秋から冬にかけて様々な行事に伴い家族のみなさんのご協力に感謝しております。その中から先日行われたクリスマスパーティーについて紹介します。今年「和のクリスマス」をテーマとして、利用者と協力しながら装飾や、キャンドル作りを行いました。当日は彩られた向陽園にて、かねてより利用者からの要望があった生寿司をメインとした各種オードブルに舌鼓をうちながら、向陽園の活動紹介を見て自分たちの活動を振り返ったり、利用者と職員の余興を見ながら笑ったりと、皆さん盛り上がり楽しまれました。

冬期帰省は、十二月二十九日始まり、一月十二日が帰園の目安となっておりますのでよろしく願います。

二月にはクロスカントリースキー大会にも参加を予定しており、参加いただけるご家族様は連絡頂けたら幸いです。

今年一年、さまざまなお協力ありがとうございました。(高橋記)

◇パオ関係◇

燦ホーム、ゆめいくそれぞれのグループホーム、センターもね、遊友やすくに、遊友はたる、サン・コロネそれぞれに変わりなく日々の活動に勤しんでおります。

十月二十二日、二十三日には、燦ホームとセンターもね合同で小樽方面一泊旅行を実施しました。参加された保護者の皆様にはご苦労さまでした。ゆめいくは、ホームごとの旅行をそれぞれ楽しみました。遊友やすくに、センターもねに分かれてのクリスマスパーティーも、楽しく盛り上がりました。

先に紹介のとおり、西町にハイム茜が完成し、一月に引越しの予定です。ホーム内で若干の移動を行う予定です。南ヶ丘のホームの工事も順調で三月末には完成の予定です。楽しく無事な年末年始をお過ごしください。

お悔やみ

ひまわり学園睦み寮に入所していた小野瑚碧くんが九月三十日に永眠されました。

ご冥福を心からお祈りいたします。

あしながき いろいろなことがあった

今年も残すところわずか。穏やかに過ぎる日常が、ことのほか貴重なものを感じる。

来年が、災害や悲しみの少ない、皆にとつて喜び多い年でありますように。(湯浅記)